

## 母性看護学実習における学生の満足度

志賀くに子<sup>1)</sup> 伊藤榮子<sup>2)</sup>

### To What Degree The Students Were Satisfied With The Training Of Maternal Nursing

Kuniko SHIGA Eiko ITOU

**要旨：**学生の母性看護学実習における満足度を知ることは、今後の母性看護学実習のあり方、また教員の指導のあり方についての示唆を得る上で重要であると考え、本学の学生を対象に、母性看護学実習全体の満足度、意欲への満足度、教員の関わりへの満足度、各実習場所における満足度の4項目について質問紙による調査を母性看護学実習終了後に実施した。40の有効回答を集計した結果、以下のことが明らかになった。

1. 「母性看護学実習全体」の満足度については、まあまあ満足しているも含めると、満足している学生は75.0%であった。
2. 「意欲」への満足度については、まあまあ満足しているも含めると満足している学生は80.0%であった。
3. 「教員の関わり」への満足度については、まあまあ満足しているも含めると、満足している学生は95.0%であった。ただし、満足していない学生はいなかった。
4. 「各実習場所」の満足度については、実習場所によりばらつきがみられた。「未熟児室」「外来」「新生児室」では、まあまあ満足しているも含めると満足している学生は90.0%以上であった。また「分娩室」「褥室」では、まあまあ満足しているも含めると満足している学生は70.0%以下であった。

**キーワード：**母性看護学実習、学生、満足度

**Summary :** We considered it important to know to what degree the students were satisfied with the practical training of maternal nursing to get hints on how practical training of maternal nursing and teachers' instruction should be given in the future.

Then, with the students of our school who had completed the practical training of maternal nursing as the subjects, we conducted a questionnaire consisting of the following four items: to what degree they were satisfied with the training of maternal nursing in general, to what degree they were satisfied with motivation, to what degree they were satisfied with teachers' involvement, and to what degree they were satisfied with each hospital room where they had practiced maternal nursing.

Forty responses were valid and revealed the following fact.

1. Satisfaction at the training in general: 75.0% of the students responded that it was very or fairly satisfactory.
2. Satisfaction at motivation: 80% of the students responded that it was very or fairly satisfactory.
3. Satisfaction at involvement of the teachers: 95.0% of the students responded that it was very or fairly satisfactory, and no one indicated dissatisfaction.
4. Satisfaction at hospital rooms: the students were satisfied with each room to different degree. As to premature infant room, outpatients, and new-born infant room, more than 90.0% of the students were very or fairly satisfied, while less than 70.0% of the students were very or fairly satisfied with the training at the delivery room and puerperal room.

**key word :** the training of maternal nursing, students, degrees of satisfaction

I. はじめに

臨床実習は、これまで学んだ知識、技術、態度を統合する場であり、看護を体験的に学ぶ貴重な学習の機会である。

学生はその臨床実習の中でさまざまなことを体験し、学びを深める。また、阿部ら<sup>1)</sup>は「実習の体験の満足感はその後の学習の動機づけに影響を与えるものである」と述べている。

なかでも母性看護学実習（以下、母性実習とする）は、女性の一生の中で最も劇的な生命の誕生の瞬間に立ち会い、次代の新しい生命を産み育てる過程に参加する機会になる。それだけに学生の学びは大きく、その学びにおける満足感はその後の臨床実習に大きく影響することが考えられる。

そこで、母性実習における学生の満足度を知ること、今後の母性実習のあり方、また教員の指導のあり方についての示唆を得る上で重要であると考えられる。

臨床実習の学生の満足度に関する先行研究としては、看護学実習全体や基礎看護学実習、成人看護学実習に関するもの<sup>2) 3) 4) 5) 6) 7) 8)</sup>はみられるが、母性実習に関してはみあたらなかった。

今回、日本赤十字秋田短期大学（以下、本学とする）の看護学科1期生（3年次後期:母性実習）に対し、母性実習の満足度について調査を行ったので結果を報告する。

II. 研究目的

母性実習における学生の満足度を明らかにする。

<用語の操作的定義>

満足度：学生自身が、ある程度思い通りにできたと感じ、気分がよいことの数合い。

意欲への満足度：学生自身が自己の取り組み姿勢に満足している数合い。

III. 研究方法

1. 対象：本学看護学科1期生（3年次後期）で母性実習の終了者40人

2. 方法

1) 母性実習の終了日に配布。筆者らが作成した質問紙による留め置き調査。被調査者には、調査の目的を説明し了解を得たうえで記名式とした。

2) 調査内容：項目は、母性実習終了後に①母

性実習全体の満足度、②意欲への満足度、③教員の関わりへの満足度、④母性実習の各場所（新生児室、未熟児室、外来、分娩室、褥室）における満足度の4項目で、多肢選択法とした。

3) 集計・分析方法：調査内容①～④をそれぞれ「満足している」「まあまあ満足している」「満足していない」に分類し、項目毎に単純集計した。

3. 調査時期：平成10年10月16日  
平成10年11月6日  
平成10年11月27日  
平成10年12月18日

IV. 結果

1. 有効回答数は40人であった。

2. 母性実習全体の満足度（表1）

母性実習全体の満足度では、「満足している」学生は3人（7.5%）、「まあまあ満足している」学生は27人（67.5%）、「満足していない」学生は9人（22.5%）であった。

表1 母性実習全体の満足度

クール 段階	5クール	6クール	7クール	8クール	5～8クール
	人数	人数	人数	人数	人数(%)
3	1	0	0	2	3 (7.5)
2	6	4	9	8	27 (67.5)
1	3	6	0	0	9 (22.5)
NA	0	0	1	0	1 (2.5)
計	10	10	10	10	40(100.0)

3. 意欲への満足度（表2）

意欲への満足度では、「満足している」学生は13人（32.5%）、「まあまあ満足している」学生は19人（47.5%）、「満足していない」学生は8人（20.0%）であった。

表2 意欲への満足度

クール 段階	5クール	6クール	7クール	8クール	5～8クール
	人数	人数	人数	人数	人数(%)
3	5	1	0	7	13 (32.5)
2	4	5	7	3	19 (47.5)
1	1	4	3	0	8 (20.0)
NA	0	0	0	0	0 (0.0)
計	10	10	10	10	40(100.0)

## 4. 教員の関わりへの満足度 (表3)

教員の関わりへの満足度では、「満足している」学生は25人 (62.5%)、「まあまあ満足している」学生は13人 (32.5%)、「満足していない」学生はいなかった。

表3 教員の関わりへの満足度

クール 段階	5クール	6クール	7クール	8クール	5～8クール
	人数	人数	人数	人数	人数 (%)
3	7	3	8	7	25 (62.5)
2	3	6	2	2	13 (32.5)
1	0	0	0	0	0 (0.0)
NA	0	1	0	1	2 (5.0)
計	10	10	10	10	40(100.0)

## 5. 各母性実習場所の満足度

## 1) 新生児室 (表4)

主に新生児の看護を学習する新生児室での母性実習の満足度では、「満足している」学生は21人 (52.5%)、「まあまあ満足している」学生は16人 (40.0%)、「満足していない」学生は2人 (5.0%)であった。

表4 各母性実習場所の満足度－新生児室

クール 段階	5クール	6クール	7クール	8クール	5～8クール
	人数	人数	人数	人数	人数 (%)
3	4	4	8	5	21 (52.5)
2	6	5	2	3	16 (40.0)
1	0	1	0	1	2 (5.0)
NA	0	0	0	1	1 (2.5)
計	10	10	10	10	40(100.0)

## 2) 未熟児室 (表5)

見学を主とする未熟児室での母性実習の満足度では、「満足している」学生は21人 (52.5%)、「まあまあ満足している」学生は17人 (42.5%)、「満足していない」学生は1人 (2.5%)であった。

表5 各母性実習場所の満足度－未熟児室

クール 段階	5クール	6クール	7クール	8クール	5～8クール
	人数	人数	人数	人数	人数 (%)
3	5	2	8	6	21 (52.5)
2	4	7	2	4	17 (42.5)
1	1	0	0	0	1 (2.5)
NA	0	1	0	0	1 (2.5)
計	10	10	10	10	40(100.0)

## 3) 外来 (表6)

主に妊婦の看護を学習する外来での母性実習の満足度では、「満足している」学生は15人 (37.5%)、「まあまあ満足している」学生は23人 (57.5%)、「満足していない」学生は2人 (5.0%)であった。

表6 各母性実習場所の満足度－外来

クール 段階	5クール	6クール	7クール	8クール	5～8クール
	人数	人数	人数	人数	人数 (%)
3	4	2	6	3	15 (37.5)
2	6	6	4	7	23 (57.5)
1	0	2	0	0	2 (5.0)
NA	0	0	0	0	0 (0.0)
計	10	10	10	10	40(100.0)

## 4) 分娩室 (表7)

主に産婦の看護を学習する分娩室での母性実習の満足度では、「満足している」学生は17人 (42.5%)、「まあまあ満足している」学生は11人 (27.5%)、「満足していない」学生は11人 (27.5%)であった。

表7 各母性実習場所の満足度－分娩室

クール 段階	5クール	6クール	7クール	8クール	5～8クール
	人数	人数	人数	人数	人数 (%)
3	4	2	5	6	17 (42.5)
2	3	3	3	2	11 (27.5)
1	3	4	2	2	11 (27.5)
NA	0	1	0	0	1 (2.5)
計	10	10	10	10	40(100.0)

## 5) 褥室 (表8)

主に褥婦の看護を学習する褥室での母性実習の満足度では、「満足している」学生は10人 (25.0%)、「まあまあ満足している」学生は17人 (42.5%)、「満足していない」学生は12人 (30.0%)であった。

表8 各母性実習場所の満足度－褥室

クール 段階	5クール	6クール	7クール	8クール	5～8クール
	人数	人数	人数	人数	人数 (%)
3	4	1	0	5	10 (25.0)
2	5	1	8	3	17 (42.5)
1	1	8	1	2	12 (30.0)
NA	0	0	1	0	1 (2.5)
計	10	10	10	10	40(100.0)

## V. 考察

### 1. 母性実習全体の満足度

母性実習全体の満足度として満足していると答えた理由は、単に母性実習が終わったという満足ではなく、理由は明確ではないが、何らかの成果が得られたことにあると考えられる。瀬下<sup>9)</sup>の調査でも「満足感の理由については、実習による学習効果や成果に関してがあげられる」と述べられている。

母性実習の場合、看護実践を通して対象者自身が変化の確認ができる。たとえば、悪露交換時、授乳時の看護実践を通して褥婦の退行性変化や進行性変化として、褥婦の身体的変化を観察できることや、新生児を沐浴する際の全身の観察を通して新生児の経日的変化を確認でき、それが、学生の目に見える学習効果として満足につながっていると考えられる。

また、本学では、母性実習に限らず成人・老人看護学実習、小児看護学実習は、同じ学生10人が1グループとなり行っている。このグループメンバーの構成も満足度に何らかの影響を及ぼしているのではないかと考えられる。中澤ら<sup>10)</sup>は「実習が進むにつれてグループとの関係が満足度に影響してくる」、また原田ら<sup>11)</sup>は「グループでの協力や話し合いを通して問題解決ができたことから、グループで行う実習の有効性が確認された」と述べている。このことは本学でも同様に、母性実習グループのメンバーがお互いに情報交換したことやグループ学習、カンファレンスなどを通して問題解決に取り組み、良好な人間関係を形成することができたことが親和的動機づけとなり、満足を得ることにつながっていると考えられる。

各看護学実習が始まる際に、より効果的な臨床実習を行うため、臨床実習グループメンバーの構成には十分配慮しているが、今後も臨床実習グループメンバーの構成について検討する必要があると考える。

満足していない理由としては、知識不足や看護実践の未熟さが満足を得るような体験に至らなかったためではないかと考えられる。また、母性実習記録と母性実習の満足度の関係について調査していないので断定的なことはいえないが、看護過程を展開しても、立案した計画を実践することで精一杯で、記録が後追いになっている現状がある。それも満足していない理由として考えられる。

しかし、臨床実習記録は学生みずからが母性実

習を振り返り、自分の学習不足や学習目標の到達度を再確認をするうえでも必要なものである。それだけに今後は、母性実習時間、母性実習内容から記録について検討する必要があると考える。

### 2. 意欲への満足度

母性実習における意欲への満足度として満足していると答えた理由は、学生自身が意識しながら、常に目標をもって母性実習をしたことや、自己学習が十分できたことが考えられる。

母性実習全体の満足度でも述べたが、3週間の中で対象の心身の変化を、悪露交換時の子宮底測定や授乳時、また新生児の沐浴時に確認できたことが、意欲を高めることにつながったのではないかと考えられる。

一方満足していない理由としては、本学では、3年次後期の臨床実習は12週間にわたって行われ、臨床実習グループによっては、それが連続的に行われる。そのため学生自身の疲労が重なり、思考力、集中力の低下を招き、それが母性実習意欲を低下させることにつながったのではないかと考えられる。

また、はじめて産婦や新生児と接するという緊張感や不安、学習不足も母性実習意欲の停滞につながっているのではないかと考えられる。

学生が自分でもやれそうだ、という思いになれるような学習の方向付けを行うことなど、意欲をもたせるように関わること、そして具体的な結果を提示して学生が行ったことへの評価を与えることが必要であると考えられる。

### 3. 教員の関わりへの満足度

臨床実習指導では、学生の能力を引き出し、学んだ知識と技術を統合し、看護実践ができるように関わるのが重要である。

教員の関わりに満足していると答えた理由は、産婦への産痛緩和の呼吸法やマッサージ法、悪露交換、搾乳、新生児の沐浴などで適切なアドバイスを得られたこと、学生に教員が密に関わることで、より細かな指導を受けることができたことなどが考えられる。

今回の調査では満足していない学生はいなかったが、今後も母性実習指導のあり方としては、母性実習目標達成のために、学生個々のレベルに応じた指導計画を立てて、指導を展開していくことが大切であると考えられる。

#### 4. 各母性実習場所の満足度

##### 1) 新生児室

3週間の母性実習期間において学生1名が2～3人の新生児を受け持ち看護を実践する。瀬下<sup>12)</sup>も「実習への満足度の程度は、実習場面での直接的な看護をどのくらい体験したかに左右される」と述べているように、新生児室での母性実習に満足している理由として、新生児の観察、沐浴の実施などの看護実践をする機会が多いことが考えられる。

今後も看護実践できるよい機会として新生児室での母性実習を継続していきたいと考える。

満足していない理由としては、看護実践の機会があったものの成果として得られたものがなかったことが考えられる。

今後は、学生の看護実践を共によく振り返り、成果が得られるように、今まで以上に綿密な助言、指導をしていくことが必要だと考える。

##### 2) 未熟児室

未熟児室での母性実習に満足している理由としては、未熟児の看護について学生自身の関心が高いこと、カンファレンスでもテーマにとりあげ学習を深めたこと、また母児分離の看護（母児相互作用を含む）を具体的に知ることができたことなどが考えられる。

満足していない理由としては、見学が主であり実際に看護実践する機会がなかったことが考えられるが、母子相互作用の重要性を認識するためにも、新生児の看護のみではなく、未熟児の看護実践も重要であると考えられる。

今後は、未熟児の看護が見学で終わらず、実践ができる機会を設けるなど母性実習の内容を検討する必要があると考える。

##### 3) 外来

外来での母性実習に満足している理由としては、看護技術（母性看護技術）としてレオポルド触診が実践できたり、分娩を前にした妊婦の期待や不安を理解できたことが考えられる。

満足していない理由としては、看護実践としての保健指導の困難さが考えられる。

外来での母性実習では、妊娠末期の妊婦を受け持ち保健指導を行うことにしているが、妊娠末期の妊婦には保健指導として主にどのようなことがあるか学生は学習しているものの、初対面の妊婦

に対する指導は、実際、相当努力を要するものであり、困難なものであると考えられる。

今後は外来での母性実習の内容、特に妊婦への保健指導の内容、方法を検討する必要があると考える。

##### 4) 分娩室

分娩室での母性実習に満足している理由としては、実際の分娩見学は学内学習では得られない感動を味わうことができる。また、分娩を見学することで褥婦、新生児の看護へと有機的に結びつけることができたことではないかと考えられる。

満足していない理由としては、産婦の経過に応じた看護実践ができなかったことや分娩を見学できなかったことが考えられる。

産婦の受け持ち、分娩の見学、褥婦の看護過程の展開と継続的な学習ができず、はじめに分娩第4期の看護実践をしてから分娩第1期の看護実践をしなければならない場合もある。今後の課題としてそれらを一連の経過として結びつけられるような母性実習の方法を検討する必要があると考える。

##### 5) 褥室

阿部ら<sup>13)</sup>は「学生は患者との関係や看護技術能力への不安を抱いて実習へでいき、そのことができた実感することによって達成感や満足感を得られる」と述べている。褥室での実習に満足している理由としては、本学でも分娩の見学、悪露交換、搾乳、新生児の沐浴など母性看護の技術が実践できたこと、褥婦の経日的変化を目の当たりにした学習ができたことなどが満足感につながったと考えられる。

満足していない理由としては、看護実践する機会はあるものの、計画の実施ができなかったこと、乳房管理の実践に関する知識、技術面が未熟なため実践よりも観察が主になったことなどが考えられる。

今後は、褥婦を受け持つ期間が約1週間であり、この時間的制約の中で看護実践をどこまで展開させるかということを含めて母性実習内容と方法を検討する必要があると考える。

本研究の限界は、対象人数が少ないこと、また対象者の主観的データを分析対象としたため一般化できない、などがあげられる。

今後の課題は、母性実習における学生の満足度について継続的に調査していくことである。

## VI. 結論

今回の調査により以下の結果が得られた。

1. 「母性実習全体」の満足度については、まあまあ満足しているも含めると、満足している学生は75.0%であった。
2. 「意欲」への満足度については、まあまあ満足しているも含めると、満足している学生は80.0%であった。
3. 「教員の関わり」への満足度については、まあまあ満足しているも含めると、満足している学生は95.0%であった。ただし、満足していない学生はいなかった。
4. 「各母性実習場所」の満足度については、母性実習場所によりばらつきがみられた。「未熟児室」「外来」「新生児室」では、まあまあ満足しているも含めると、満足している学生は90.0%以上であった。また「分娩室」「褥室」では、まあまあ満足しているも含めると、満足している学生は70.0%以下であった。

また、「母性実習における学生の満足度を高める要因」としては、以下の4点が明らかになった。

1. 学生自らの母性実習目標と看護実践の結果が一致しているとき。
2. 教員の期待度と学生の母性実習成果が一致し、その評価が明確にされたとき。
3. 母性実習グループのメンバーから親和的な動機づけが生じた場合。
4. 自己の母性実習目標に即した母性実習の準備(母性実習のレディネス)ができているとき。

## おわりに

今回の調査にご協力くださいました本学の看護学科1期生に、心よりお礼申し上げます。

## 引用文献

- 1) 阿部明美, 原田慶子: 学生の達成感、満足感から基礎看護学実習 I を考察する (第一報), 日本看護学教育学会誌, 8 (2), p.79, 1998.
- 2) 前掲1), p.79
- 3) 瀬下文子: 看護実践場面での達成感、期待感、満足感に影響を与える実習での体験, 日本看護学教育学会誌, 7 (2), p.67, 1997.
- 4) 瀬下文子: 実習の進行に伴う「満足感」の推移,

日本看護学教育学会誌, 8 (2), p.67, 1998.

- 5) 中澤明美, 小池妙子: 看護学生の臨床実習の満足度に影響を与える要因, 日本看護学教育学会誌, 8 (2), p.178, 1998.
- 6) 阿部明美, 原田慶子: 学生の達成感、満足感から基礎看護学実習 I を考察する (第二報), 日本看護学教育学会誌, 9 (2), p.73, 1999.
- 7) 原田慶子, 阿部明美: 学生の達成感、満足感から基礎看護学実習 I を考察する (第三報), 日本看護学教育学会誌, 9 (2), p.74, 1999.
- 8) 荒添美紀: 看護実習における満足感、達成感について, 日本看護研究学会雑誌, 22 (3), p.221, 1999.
- 9) 前掲3), p.67
- 10) 前掲5), p.178
- 11) 前掲7), p.74
- 12) 前掲3), p.67
- 13) 前掲1), p.79

## 参考文献

- 1) 荒川千登世, 内田宏美, 豊田久美子: 学生の自己評価からみた実習における今後の課題, 日本看護学教育学会誌, 6 (2), p.59, 1996.
- 2) 藤岡完治: 臨地実習教育の授業としての成立, 看護教育, 37 (2), pp.94-101, 医学書院, 1996.
- 3) 福田敦子, 金武直美, 草場ヒフミ: 看護実習における教員の学習支援についての検討, 日本看護学教育学会誌, 9 (2), p.97, 1999.
- 4) 舟島なをみ: 看護学実習に関する看護学教育的検討, 看護教育, 37 (2), pp.108-114, 医学書院, 1996.
- 5) 三上れつ, 布施淳子, 高橋みや子: 基礎看護学実習における目標達成度に関する検討, 日本看護研究学会雑誌, 20 (3), p.347, 1997.
- 6) 名古ユウ子, 吉田真紀, 前田明子: 学習意欲を促す要因, 看護教育, 39 (4), pp.298-303, 医学書院, 1998.
- 7) 大下静香, 矢口みどり, 大森武子: 臨地実習、本当の学習がそこから始まる, 看護教育, 39 (6), pp.435-440, 医学書院, 1998.
- 8) 大津明美, 谷口初美, 小北良子, 松山敏剛: 学生のエゴグラムパターン分析による母性看護学実習効果の検討, 母性衛生, 40 (2), p.303, 1999.
- 9) 柴田恵子, 岩瀬裕子, 土屋尚義, 金井和子: 臨床実習中の学生生活と自覚的疲労症状との関連, 日本看護研究学会雑誌, 19 (2), pp.97-98, 1996.

- 10) 滝沢恵子：魅力ある実習をするために，看護教育  
新カリキュラム展開ガイドブックNo10，母性看護  
学，pp.46-48，医学書院，1996.